

皆様、御無沙汰です、少し間が空きました、お待たせ致しました。

## 『惑星ハシグチ』 第一期終了です。

約一年に渡ってお送りしました、『惑星ハシグチ』ですが、今回の○七号をもちまして、第一期を終了させて頂きます。暫くのお休みを頂いた後、よりグレードアップした紙面＋インターネットウェブサイト上、両方にて再登場する予定です。今回はこれまでの軌跡を振り返り、惑星ハシグチの原点を、再確認したいと思っております。

## 特集、「惑星ハシグチ」は いかにして生まれたか？

### 一、まずハードありき。

先ず、前提として、ハードがあった。この惑星ハシグチを作っているPCの事である。  
或日突然、私の所にノートパソコン、それも、デザインやアート方面の方に支持を受けて、MACのpowerbook1400という製品がやって来たのだ。今を去ること二年前の六

月。まだ福岡に居る頃の事だ。

二〇数年いた福岡時代の、最も初期の頃から御縁を頂いていた、福岡県久留米氏のK氏の御提案で、氏の御友人、N氏のPCを、プリンターとともに、一式譲り受けたのだ。少し古いシステムだが、特に故障もしてない。N氏はアートにも機械にも造詣深くMACのPCをこよなく愛するお方、私と一度位しか面識がないにも関わらず、K氏の依頼を快諾。さらには寧に使用方法などを教えて頂く。このお二人がいなければ、まず、『惑星ハシグチ』は生まれなかった。ご二人には深く感謝！であります。その後、引越しの準備、十月引越し、荷物整理……であつという間に半年経過。

PCが設定されたのは、翌年の一月の事。プリンターにインクをセットし、やっと初めてこのノートパソコンと向き合う。

「さて、これで、一体何が出来るのか？」一緒に頂いた、ガイドブックを参考に色々このPCで出来ることを調べるうちに、縦書きが出来る事が判る。練習がてらに作ったのが、『惑星ハシグチ』の前身である『田舎通信』。あちこちに住んでいる、身内親族向けに、離れている故郷の様子を伝えようというのが動機だ。実際、日々、故郷でどういうような事が行われているのか、故郷が今どういう状態なのか、たまに帰省して、母親からその断片を聞き齧るだ

けでは、まったく見えてこない、デイーブな田舎、故郷のリアルな様子を少しでも伝え事が出来たらと思つたわけだ。そして一部をあちこちの友人等に試しに送つたら、以外にも興味を持ってくれた。

自分がそうだったから良く分かるが、都市で生活していると、田舎育ちの自分でさえ、季節感も希薄になるし、田舎が今どんな季節を迎えている、どんな花が咲き、どんな野菜が作られているのか、全く見えて来ない。ましてや、都市では、ほぼ消滅した地域共同体の様子等、知る由もない。田舎に戻つて来て初めて見えて来る、気付くモノがある。それを伝えたいと思つたのだ。都市が発信するメディアは星の教程があるが、デイーブな田舎から発信されるメディアはそれらに比べれば、そう多くはないはずだ。

### 二、別のモチベーション

動機は他にもあつた。

そもそも、私はもつと若い頃、自分の故郷の田舎さ加減が嫌いだつた。ここは誤解なきよう書いておかないでほしいが、私は田舎の自然が嫌いだった訳では無い。田舎の自然は時に、無情な姿を見せるときもあるが、その大なる懐の中で育まれて育つたという実感がある。感謝してもしきれない。或る意味、惑星ハシグチの自然とは私そのものだとも思うくらいだ。

私の故郷は、昭和の高度成長期に炭坑町として栄えたが、閉山になつた後はこれといった産業もない過疎の町。なので、仕事そのものが無い。だから都市へ出た。といえなくもないのだが、それが故郷を出る第一の動機ではなかった。それ以上に、私にとつて辟易してたのは、閉鎖的で視野の狭い価値観が蔓延る、私の故郷の人々の意識だつたわけです。

この町を出てから二十年あまり経ち、再び戻つた。少しは田舎の人々の意識も拡大しているかと思いきや、相変わらず嘖然とすることも多い。具体的な例をあげることがここでの主旨ではないので書かない。多分、殆ど此のエリアから出ることもなくずつと暮しているからだと思はう。

ここにきて、自らの運命を呪うのは簡単だ。しかし、例えば、古今東西の精神世界の代表的賢者が、たいして同じように述べてるように、どうやら人生は大ざっぱなところ、生まれる前に、自らの魂が成長するよう、あらゆる課題を設定して生まれるものらしい。そう考えると、私の故郷戻りも、予め設定されたものなのかもしれない。いやはやである。だとすると、そのマイナス面ばかり観ても、それだけで、この三次元での、残りの人生は終了することだろう。それではあまりに、カナシイ。モッタイナイ。ここは、意地でもプラス面を観て、再発見していく

覚悟。そういう思いを、この『惑星ハシグチ』に託そうとしているところだ。

## 「惑星ハシグチ」とは 何なのか？

### 一、三次元上の位置。

惑星ハシグチとは、長崎県佐世保市

う住所のエリアの一部の総称。私の造語である。地形的にこのエリアは、互いの町の中心部から遠く離れていて、標高約四〇〇Mの山々が城壁のように外部との物理的な壁を形成している。或る種、閉ざされた地域で、独立した風土を作り出している気がする土地なのだ。

### 二、別次元の入口。

閉ざされた地形は個人の内宇宙を増大させる力があると思う。小さい頃の私は、ここで独自の空想世界を構築し、永くその住人だった。何の変哲も無い風景に別の名をつける、不思議とそこが、別の意味合いを帯びて来る。『惑星ハシグチ』も、そう呼ぶことによって、全く違った風景を私に提示してくれる、気がする。それを楽しんで。そういう楽しみでも創出しないと、ここではやっていけない。というところもある。宮沢賢治が、近所の北上河口を『イギリス海岸』と呼んだの

も、そういう気持ちがあったのでは？と、今頃になって思う。余りにも有名、余りにもそのファンが多いので、殆ど敬遠していた、かの詩人だが、最近になって、少し気になり始めた。アンドレイ・タルコフスキーのもうひとつの映画『ストーカ』に出てくる「ゾーン」や、安部公房の作品で、故、勅使河原（てしがわら）宏氏が見事に映像化した、『砂の女』（六四年）に登場する「部落」のイメージも、自分の中では「惑星ハシグチ」と重なって来る。三次元の惑星ハシグチの日々に追われて、こちらの次元は中々描写出来ない。今後展開出来たらと思う。

### 特別寄稿

## 「セチバル話は世知原話 しか？（その二）」

※編註：世知原（せちばる）とは、

町名。

中川正生

### 二、位牌ほめ

馬鹿息子が嫁をとった。祝儀の晩は何も云うなと云はれて、居たのでだまって居た。馬鹿だと云うが立派な婿だと舅もほめて居た。何日かたって、舅さんから、牛を買ったから見においで来てくれと云って来た。行ったら牛をほめねば出来ん。「耳ぐるもよし毛びきもよし、爪といひ膝も」と云い立派な牛です」とほめなさい、と嫁に注意されて行っ

た。行ってその通りにほめたので、舅さん大変満足に思った。「馬鹿だというのが何うして賢い婿だ」とほめた。又幾日かして、仏様の位牌を作ったから拝みに来てくれと舅さんから便りがあった。婿は行つた。ほめねばいかんと聞いていたので、又「耳ぐるもよし毛びきもよし、爪といひ膝も」といひ誠に立派な位牌が出来ました」とほめた。舅さんはあまりの事に大変怒って、馬鹿にもほどがある。と云って娘は引き取ってしまった。（渡良村下條松三朗氏）

### 三、餅が食ひつく

昔々、或所に、大変愚かな男がいた。或日嫁の家に餅搗きに行つた。いろいろ御馳走があつた後、べつたんべつたんと餅を搗き始めたが、杵を振り上げる拍子に、餅が杵にくっ付いてあがつて来た。愚か男がびっくりして、餅の食イ付イち来たぞ、早く搗け搗けと云つても、俺アもういや、喰い付かるけにと云つて受け取らない。それならと云つて、長い棒の端に其風呂包を括つて、かつがせてやつた。途中で風呂敷包がすーつとずれて、肩に落ちかかて来た。男は驚い棒を投げすてて、息も絶え絶えに我家に逃げ帰つた。妻が訳を聴聞くと右の始末である。「何ちう馬鹿な人ちやらうか。餅が人工食い付くもんですな」とおこると、けげんな面つきをして、「をしが話ちうもんか、あえんな硬か杵エでム

喰いつくとばい。俺が様なもんば喰い殺すち、ね事ンあらうなーエ」と云つて震えて居た。

### 四、オトヨウの御馳走

馬鹿息子が或時、嫁の在所に御馳走に招かれて行つた。嫁の在所では、髯様の初でのお出でといふので、大変なおもてなしをした。その子供がお客様の前に行つて、出してある御馳走をねだるので、「ありやオトヨウちやけに、あたらんこつ」姑さんがだまして居た。折角の御馳走であつたが、髯さんは少しも箸をつけなかつた。両親は仕方がないので、お土産として苞に包んでやつた。髯さんはそれを竹の先に括りつけて怖ろし怖ろしとかついで帰りかけた。家に帰つてから、嫁さんがそれを聞いて食べようとすると、「それアオトヨウちやけに、当たるな、当たるな」云つて少しも食わせなかつた。（渡良村米田安雄其の他）

現在ウエブ内に、ホームページとブログを作成中。もう間もなく公開できる予定。工事中でも観たい、という方は乞う連絡。また、御連絡が送れましたが、今年から小面積だがお米を作ることにした。参加型『お米プロジェクト09』も既に始動中。6月初めには田植えを敢行。一部の友人には既に声を掛けているが、興味ある方、乞う連絡。メールか